

阪神・淡路大震災から20年

地域に即した防災対策を学びました！

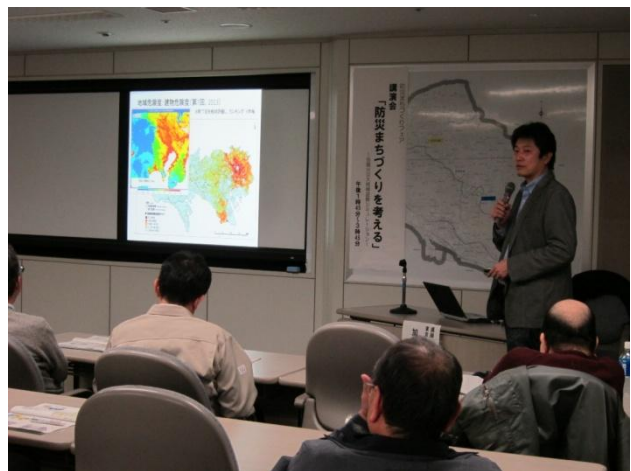
1月14日、15日の2日間、杉並区役所では「防災まちづくりフェア」が開催されました。このイベントは、阪神・淡路大震災の発生日に合わせて、毎年開かれているもので、ロビーでは大震災に備える耐震相談や家具の転倒防止、ガス安全対策などの展示があり、来場者などが足を止め見入っていました。また、今年は、阪神・淡路大震災から20年の節目となっているため、杉並建築会と共催し、東京大学生産技術研究所・准教授の加藤孝明氏による基調講演も行われ、地域に即した防災対策を講じる必要があることを学びました。

平成7年1月17日の早朝に起きた阪神・淡路大震災。尊い人命、幸せな時間を一瞬で奪ってしまった大災害から、20年の時間が経過しました。区では、この大災害の記憶を風化させることなく、発生が予想されている首都直下地震に備えるため、毎年、この期間で防災まちづくりフェアを開催しています。

フェアでは、阪神・淡路大震災の写真や耐震相談などの地震発生時の備えを紹介しています。また、杉並区が全国に先駆けて、後退部分を一定の強制力を持って整備することを盛り込む条例改正を検討している狭あい道路の拡幅整備の事業について、説明するコーナーも設けました。

今年は、20年の節目にあたることから、区内の建築士などで構成する杉並建築会との共催により、「防災まちづくりを考える」をテーマとした講演会が催されました。講師は、地域安全システム学を専門とする加藤孝明氏です。午後1時45分から、区役所6階の会議室で始まった講演会には、建築士会のメンバーや阿佐谷・高円寺の木造密集地域の住民などを中心に、70名ほどが参加しました。

講演では、「防災対策は首都直下地震を敵と見立て取り組んでいます。さまざまなシミュレーションの中から最大の被害を想定するよりは、杉並の地域をよく知ることが大切です。」と話しました。また、帰宅困難者や液状化などの問題が、大きく報道されていますが、このことで生命を失うことはなく、地震に伴う現象として冷静に捉えることが必要との説明に来場者は大きく頷いていました。さらに、東日本大震災以降、自助・共助・公助のバランスが崩れてしまっているように感じていて、誰かがではなくまずは自分が何をすべきか、再度考えることが防災まちづくりの第一歩と話しました。



【報道機関 問い合わせ先】

都市整備部防災まちづくり担当課 電話3312-2111 内線3331